

アンコーナのチリアコ伝のために

久 志 本 秀 夫

略称一覧 (50音順)

- オリヴィエーリ本 = Olivieri, Annibale degli Abati, *Commentariorum Cyriaci Anconitani nova fragmenta notis illustrata*, Pesaro (1763).
- コ ル ッ チ 本 = Colucci, G., *Delle antichità picene*, XV, Fermo (1792), 1-155.
- サ ッ バ デ ィ ー ニ 本 = Sabbadini, R., "Ciriaco d'Ancona e la sua descrizione autografa del Peloponneso trasmessa da Leonardo Botta," *Miscellanea Ceriani*, Milano (1910), 183-247.
- ティラボスキ本 = Tiraboschi, G., *Storia della letteratura italiana*, VI, 1, Modena (1776), 134-163.
- デ・ロッシ本 = De Rossi, G. B., *Inscriptiones Christianae Urbis Romae*, II, Roma (1888), 356-387.
- フ ォ イ ク ト 本 = Voigt, G., *Il Risorgimento dell'antichità classica ovvero il primo secolo dell'umanesimo*, I, Firenze (1888), 269-285.
- ボ ド ナ ー 本 = Bodnar, E. W., *Cyriacus of Ancona and Athens*, Bruxelles-Berchem (1960).
- メ フ ス 本 = Mehus, L., *Kyriaci Anconitani itinerarium nunc primum ex ms. cod. in lucem erutum ex bibl. illus. clarissimique Baronis Philippi Stosch*, Firenze (1742).
- モ ロ ニ 本 = Moroni, C., *Epigrammata reperta per Illyricum a Cyriaco Anconitano apud Liburniam*, Roma (c.a.1660).

(一)

その出身地、アンコーナ (中部イタリア、マルケ地方の中心都市、アドリア海に面する良港あり) に因んでアンコーナのチリアコ Ciriaco d'Ancona (ラテン語読みではキリアクス・アンコニタヌス Cyriacus Anconitanus) と呼ばれた人は、15世紀における碑文蒐集家として著名である。

チリアコはいわゆる人文主義者ではなく、商人であった。生涯の大半を旅に送ったが、特にバルカン、ギリシア方面へ行くことを好み、古代の遺跡をスケッチしたり、碑文を写したりした。彼は1391年頃に生れ、1455年頃に没したといわれる。15世紀は古典古代文化の再生期で、古代の碑文も識者に注目されていた。ラテン語碑文は、イタリアが本場でもあり、早くから集められたが、ギリシア語碑文の蒐集に関しては、チリアコは独自の位置を占めている。⁽¹⁾

チリアコについての研究は、彼の業績が偉大であるだけに、文字通り山積している。しかし彼の総合的な伝記は、1888年にデ・ロッシがラテン語で発表して以来、未だに誰も手がけていない。

⁽²⁾
ジョヴァンニ・バッティスタ・デ・ロッシ Giovanni Battista De Rossi は、キリスト教考古学者、碑文学者で、ローマのカタコンベを発掘して絵画、モザイク、碑文などの貴重な資料や、教皇、聖者の墓を世に出した。古典古代の碑文学にも明るく、「ラテン碑文集成」*Corpus Inscriptionum Latinarum*第6巻を編纂した。チリアコ伝は「ローマ市のキリスト教碑文」*Inscriptiones Christianae Urbis Romae*, I, Roma (1888), 356-387 (以下「デ・ロッシ本」と略称する)にある。デ・ロッシは、当時利用できるあらゆる史料を使い、自らも新史料を探索して、チリアコの略伝を書きあげた。だが何分にも今から約80年前の研究であり、その後、新しい史料も発見されたので、総合的なチリアコ研究が望まれている。アシュモールの論文に「ジャン・コラン Jean Colin の総合研究が出版目前」とあるが、まだ出ていない。⁽³⁾

デ・ロッシは1822年2月23日、ローマで生れ、1894年9月21日、カステル・ガンドルフォ Castel Gandolfo で没した。この碩学の主著をあげておく。

- (1) “Le prime raccolte d'antiche iscrizioni compilate in Roma tra il finire del sec. XIV e il cominciare del XV”, *Giornale arcadico*, CXXVI—CXXVII (1852), 254—355 & 9—77.
- (2) *La Roma sotterranea cristiana*, Roma (1864—1867, 1887—1898) .
- (3) *Analisi geologica e architettonica del cemetero di Callisto*, Roma (1867) .
- (4) *Mosaici cristiani e saggi di pavimenti delle chiese di Roma anteriori al sec. XV*, Roma (1872—1896) .
- (5) *Corpus Inscriptionum Latinarum*, VI, I: *Inscriptiones Urbis Romae*, Berlin (1876) .
G. Henzen と共著.
- (6) *Piante iconografiche e prospettiche di Roma anteriori al sec. XV*, Roma (1879) .

デ・ロッシ以前で見るべきものは、ティラボスキ⁽⁴⁾ (1776年)、フォイクト⁽⁵⁾ (1880年) があり、デ・ロッシ以後ではツィーバルト⁽⁶⁾ (1902年) とマッケンドリック⁽⁷⁾ (1952年) の略伝がある。マッケンドリックの英語による略伝は、ツィーバルトによるドイツ語の略伝と殆んど変りはない。ボドナー⁽⁸⁾ (1960年) は、デ・ロッシが余り重視しなかった史料と、デ・ロッシ以後に発見された史料を用いて、チリアコの後半生に関する知識を我々に与えてくれた。その他のチリアコ伝に関連する論考は、折に触れて検討していきたい。

次に、チリアコ研究者が依拠した史料を概観しておく。

註(4)で述べたように、ティラボスキのチリアコ研究は、フランチェスコ・スカラモンティ Francesco Scalamonti によるチリアコ伝を史料とした所に意義があった。

スカラモンティ家は、1114年にアンコーナに移住して来た高貴な家柄であった。その最初の人は、グリエルモ・デ・ショモン・ダ・アルル Guglielmo de' Chomon da Arles で、1124年にカテリーナ・デ・カシヨッティ Caterina de' Casciotti と結婚し、やがてパオロ Paolo が生れた。以後、姓をスカラモンティと変えた。パオロとその妻シモーナ・デ・チーミ Simona de' Cimi より、スカラモンティ家の多くの支脈が出来て、数々の有名人を出した。

フランチェスコに関する史料は、ごく僅かで、生年、両親などは不詳であるが、政治家としての人生を送ったようである。

1436年2月16日、フランチェスコ・スカラモンティは、フランチェスコ・スフォルツァによってファブリアーノ Fabriano の副官に任命されている。スカラモンティは、1438年4月7日迄ファブリアーノにいた。1441年、スカラモンティはノルチア Norcia の執政官となった。1450年にはマルケ地方の二つの町、カステルフィダルド Castelfidardo とオファナーニャ Offagna の問題で、ローマ教皇庁へ使節として赴いた。1452年には、ヴェネツィアとアンコーナの紛争解決の為にヴェネツィアへ行った。彼は1468年、アンコーナでペストの為に死んだという。(スカラモンティ家及びフランチェスコの政治家としての略歴は Spadolini, E., "Il biografo di Ciriaco Pizzecolli", *Le Marche*, I (1901), 70-72. より要約した。没年については「フォイクト本」269頁、註2を参照)

スカラモンティがチリアコの友人であったことを証する史料として、手紙が残っている。1438年9月17日付、チリアコよりスカラモンティ宛の手紙が、「モロニ本」41-42頁、「メフス本」73-76頁にある。又、ヴォルテルラ Volterra のガアルナッチ図書館 Biblioteca Guarnacci には、1441年のスカラモンティよりチリアコ宛の手紙が保存されている。(Codex, 5031, XLIII)。

スカラモンティがいつチリアコ伝を書いたかは、はっきりしないが、ラウロ・クイリーニ Lauro Quirini の依頼でまとめたという。このことは、チリアコ伝の冒頭にスカラモンティよりクイリーニ宛の手紙があることで分る。ラウロ・クイリーニはヴェネツィアの貴族で、⁽⁹⁾1420年、クレタのカンディアで生れた。ヴェネツィアでラテン語、修辞学、哲学を学び、ついでパドヴァで学んだ。1440年、大学を卒業、1449年、ヴェネツィアでラテン・ギリシア文学を教え、1451年、パドヴァで雄弁学と倫理学を講じた。彼は1466年頃、ヴェネツィアで没した。

ところで、スカラモンティのチリアコ伝は1435年で終わっているもので、ほぼ1435～6年頃に書かれたと思われる。フォイクトによると、このチリアコ伝はチリアコ自身が提供した資料より、スカラモンティが一人称を三人称に変えたものに過ぎない、その証拠に所々一人称がそのまま残っているという。⁽¹⁰⁾又、チリアコの提供した資料は、彼が生涯にわたって書き続けた「コンメンタリア」(後出)の一部であるという説もある。⁽¹¹⁾これらの問題は、史料を分析することによって結論を出すべきであるので、ここでは以上の諸説を紹介するだけにとどめておく。

フェリーチェ・フェリチアーノ Felice Feliciano はチリアコに私淑していた同時代の筆写

アンコーナのチリアコ伝のために

家であったが、サムエーレ・ダ・トラダーテ Samuele da Tradate の勧めでスカラモンティのチリアコ伝を筆写し、更にチリアコの書簡、チリアコを称賛する人々の詩などを付加して一写本を残した。これがトレヴィーゾ Treviso のカピトラレー図書館に現存している。⁽¹²⁾ ティラボスキが参照したのは、この写本であった。コルッチは同じ写本から、碑文を省略して1792年に公刊した。⁽¹³⁾ トレヴィーゾ写本の写真版による復刻が予告されているが、まだ実現していない。⁽¹⁴⁾

⁽¹⁵⁾
フェリチエ・フェリチアーノは、1433年8月ヴェローナで生れた。その10年又は15年前、父グッリエルモ Guglielmo はレッジョ Reggio よりヴェローナに移住した。母はカテリーナ Caterina , 兄はベルナボ Bernabo 姉(或いは妹)はマシーナ Masinaで、彼女はヴェローナの公証人バルトロメオ・マニーニ Bartolomeo Manini と結婚した。

フェリチアーノの前半生は、はっきりしないが、はじめから筆写生として訓育されたい。年代的に一番早いフェリチアーノによる写本は、1458年迄さかのぼることができる。更にフェリチアーノは詩、小説を書き、古典古代の遺物・遺跡を愛好した。最初の自筆の詩集(Modena, Biblioteca Estense, codex, a. N. 7. 28) は1460年のものだが、友人の画家マンテーニャ Mantegna へのソネットがある。やがてジョヴァンニ・マルカノヴァ Giovanni Marcanova がフェリチアーノのパトロンとなった。マルカノヴァは、パドヴァ出身の医者、哲学者、愛書家で、当時ボローニャで教えていた。1464年の9月22～23日、フェリチアーノ、マルカノヴァ、マンテーニャ、サムエーレ・ダ・トラダーテの一行が、ガルダ湖(イタリア最大の湖)を周遊して古代の遺跡を探った。⁽¹⁶⁾ サムエーレ・ダ・トラダーテは、マンテーニャと同様、マントヴァ Mantova のゴンザガ Gonzaga 家に仕えていた。この周遊の後まもなく、⁽¹⁷⁾ フェリチアーノにスカラモンティのチリアコ伝を筆写するように言ったという。ボドナーによれば、トレヴィーゾ写本の完成は1465年となっている(「ボドナー本」117頁)。1465年には、フェリチアーノはボローニャのマルカノヴァ図書館で働いていた。フェリチアーノが、どこで、誰の書(多分クイリーニの所蔵本からであろうか)からチリアコ伝を筆写したかは不明であるが、ボローニャより東南のアンコーナ、東北のヴェネツィア、トレヴィーゾ、西北のマントヴァへはいずれも割合に近いので、フェリチアーノが出かけて行ったか、或いは本がボローニャまで運ばれて、マルカノヴァの図書館で写されたとも考えられる。

⁽¹⁸⁾
1466年3月、フェリチアーノの遺書が作られている。以後3年間、フェリチアーノの消息は、1468年の文書(London, British Museum, Cotton MS. Nero A.10) と1469年の詩(Venezia, Biblioteca Marciana, Cod. It. IX. 257〔6365〕)を除いて不明である。

フェリチアーノ晩年の伝記史料は、5巻に及ぶ彼の書簡で、最後のプレシャ写本を除いては本人の自筆本である。

(1) London, British Museum, Harley MS. 5271.

(2) Oxford, Bodl. Library MS. Canon. Ital. 15.

(3) Verona, Biblioteca Comunale, Cod. 3039. (Cf. Fiocco, G., *Nuovo Archivio Veneto*, XLI (1921), 162—163; *Archivio Veneto-Tridentino*, II (1926), 188—199)

(4) Cambridge, Mass., Harvard MS. Typ. 157.

(5) Brescia, Biblioteca Quiriniana, Cod. C. II. 14.

1470年又は71年、フェリチアーノはヴェローナを去った。詳細は不明であるが、ヴェローナ市民のねたみと誹謗によって追われるようにして出たようである。パトロンであったマルカノヴァは既に没し

アンコーナのチリアコ伝のために

ていた。1471年、フェリチアーノはボローニャ郊外のカステル・ディ・サンジョルジョ Castel di San Giorgio の助任司祭の職にあったが、まもなくボローニャへ戻り、1473年末迄いた。1474年と75年の書簡によって、彼がペルージアで、教皇使節フィリアジオ・ロヴェレルラ Filiasio Roverelle の周辺にいたと推測できる。フィリアジオは、1476年ラヴェンナ大司教として、おじのバルトロメオ・ロヴェレルラ Bartolomeo Roverella 枢機卿を継いだ。次にフェリチアーノは、ヴェネツィア貴族アンジェロ・アドリアーノ Angelo Adriano がナポリ使節となった際、行を共にしたようである。他に、ローマ、シエーナ、国外へはハンガリー（バルトロメオ・ロヴェレルラに従ったらしい）、スペインへ行ったようである。1475年、フェリチアーノはフェラーラ Ferrara の印刷業者セヴェリーノ Severino と提携した後、ドイツ、ヴェネツィア、フェラーラ、ヴェローナを廻り、年末フェラーラへ戻った。この間、5冊の本が刊行された。1476年、フェリチアーノはインノチェンテ・ツイレート Innocente Zileto の協力で、自分の印刷所をポイアーノ Poiano に設け、ベトラルカの「有名人の書」 Libro degli uomini famosi を同年10月に完成した。フェリチアーノの最後のパトロンは、トレント Trento の司教ヒンデルバッハ Hindelbach であった。1475年のドイツ旅行は、トレント行を指すのかもしれない。ヴィーンの宮廷図書館には、1478年にフェリチアーノがヒンデルバッハに贈った、プトレマイオス「天文学集成」(1472年版)がある。⁽²⁰⁾ 1479年夏、フェリチアーノは悪疫を避けて、ローマ郊外に引きこもったが、その後まもなく死んだものと思われる。その年も場所も墓も分らない。

コルッチは聖職者、考古学者。フェルモ Fermo で1752年に生れ、同地で1809年に没した。 *Delle antichità picene* は、1786年より1797年にかけて編纂されたが、その第15巻にフェリチアーノの写本が収録されたわけである。コルッチの刊本の内容は、50—100頁にスカラモンティのチリアコ伝、次に Naumachia Regia (1435年8月ポンツァ Ponga 島附近におけるジェノヴァ艦隊とアラゴンのアルフォンソの艦隊との海戦記)、カルロ王の詩に対するソネット3篇、ついでチリアコの書簡(フランチェスコ・スフォルツァ宛、フィリッポ・マリア・ヴィスコンティ宛、教皇エウゲニウス4世宛など)、チリアコへの讃歌が続き、最後にヴェネツィアの人、アントニオ・レオナルディ Antonio Leonardi のフェリチアーノ宛の書簡(1457年10月4日付)で終る。本文に入る前にコルッチの解説があり、1435年以前はスカラモンティのチリアコ伝に即して、1435年以降はティラボスキの研究を大幅に引用しつつ、チリアコの生涯を述べている。

(二)

1435年以降の伝記史料は、コンメンタリアと書簡類である。コンメンタリア Commentaria なる名称は、チリアコのエウゲニウス4世宛の書簡に見られる。

チリアコは、1441年教皇エウゲニウス4世に手紙を書いたが、その長文の草稿とチリアコの他の書簡8通とを、ロディ Lodi の聖職者イオアンネス・ボノニウス Ioannes Bononius が1498年に筆写した。この写本はデ・ストッシュ男爵の所有物であったので、「デ・ストッシュ写本」と通称されていて、現在ヴァチカン図書館の所蔵となっている (Codex Vaticanus Ottobonianus, 2967)。メフス Mehus はこの写本の内容を、1742年に刊行した。Mehus, L., *Kyriaci Anconitani Itinerarium*, Firenze (1742) (以下「メフス本」と略称する) がそれである。「キリアクス・アンコニタヌスの旅程」とは、エウゲ

アンコーナのチリアコ伝のために

ニウス4世宛の書簡の草稿を指し、チリアコが自分の旅行について述べている為、伝記史料の重要なもの一つとなっている。コンメンタリアという語は、「メフス本」の23, 36, 37, 38頁に出てくる。ただ、草稿の内容には、チリアコ自身でさえ自分の旅の年代を誤っている個所もあるので、批判的に読まねばならない。

実際にチリアコがエウゲニウス4世に送った手紙(1441年10月18日付)は、はるかに短く、彼の旅行についての記述もない。チリアコは、コジモ・ディ・メディチの為に、同書簡のコピーを作った。それがフィレンツェのラウレンツィアナ図書館に現存している(Firenze, Biblioteca Laurenziana, Codex Laurentianus, 80,55)。又、フェリチアーノも同書簡を筆写し、トレヴィーゾの写本に収めたので、コルッチの刊本にもある(「コルッチ本」119-122)。

さて、コンメンタリアであるが、チリアコはその旅路において一種の旅日記のようなものを持ち歩き、見聞したものを次々に書きこんでいったようである。それを実見した人の言葉から、1441年には3巻、彼の死⁽²¹⁾迄には6巻⁽²²⁾となっていたと考えられる。

惜しいことにチリアコの没後、コンメンタリアは完全な形で後世に伝わらなかった。その運命については諸説がある。モムゼンは、チリアコの与えた影響が大きかったことから、没後、君主や聖職者がコンメンタリアを分解してそれぞれ自分のものにしてしまったのではないかと⁽²³⁾いう。デ・ロッシは、チリアコの親族によってコンメンタリアは保存され⁽²⁴⁾るが、その行方については分らないとする。ところが1910年に至ってサッパディーニが新説を出し、かつてペサロ Pesaro のスフォルツァ家図書館に Chiriacus という写本の項目があったが、これこそコンメンタリアであって、1514年の図書館の火事で灰となってしまった⁽²⁵⁾という。現存しないものだから Chiriacus なる写本が、コンメンタリアそのものかどうかを知るすべはない。だがサッパディーニの説も相当の説得性を持っていて、学界では1514年焼失説が定説となりつつある。

ところで我々にはコンメンタリアの断片が伝わっていて、チリアコの伝記史料として、又、それにもまして今は湮滅した古代の遺跡や碑文を復原する為の史料として、重要な役割を果している。

17世紀の人、カルロ・モロニ Carlo Moroni⁽²⁶⁾ はかつてローマにあったバルベリーニ図書館の司書で、所蔵の写本より一書を印行した。Epigrammata reperta per Illyricum a Cyriaco Anconitano apud Liburniamで、コンメンタリア1435~37年の断片である。(以下「モロニ本」と略称する)。

モロニは底本とした書が、チリアコ自身の手になったものかどうかを疑い、自分の本を印刷しただけで公刊しなかった。タイトル・ページもなく、発行地、発行年もない。編者モロニの名もなく、第1頁に前記の表題がトップにあり、それに続いてコンメンタリアの断片が始っている。それゆえ刊行の年については、1654年説⁽²⁷⁾、1660年説⁽²⁸⁾、1664年説⁽²⁹⁾など、いろいろあるが、ボドナーは史料を検討して1660年以前⁽³⁰⁾ということを明らかにした。

又、ボドナーはモロニの使った底本は、コンメンタリア原本ではなく、その写しであること⁽⁸¹⁾を論証した。

1902年、教皇レオ13世はバルベリーニ・コレクションを入手し、ヴァチカン図書館の蔵本とした。ボドナーはヴァチカン図書館に依頼して、コレクションの中からチリアコの項目を探してもらったが、Codex Barberinus latinus, 2098 (16世紀初めの写本)があるのみで、「モロニ本」の底本は現われなかった。⁽⁸²⁾

ボドナーは、モロニの印刷本に関連する種々の写本を検討した結果、次の仮説を出している。「モロニ本」のコンメンタリア1435—37年の部分は、一部に時間的錯綜が見られる。しかし別の写本の中には、「モロニ本」の如き錯綜がなく、時間的に筋が通っているものもある。そこでボドナーは、コンメンタリア原本より、その頁がバラバラになる前にコピーされた仮定の写本をX₁と設定した。X₁の特色は、コンメンタリアの日付けを省略し、第一人称を第三人称に変えていることである。しかし名詞の対格を主格に変えないままで写された。このX₁より次の写本と刊本が派生した。

- (1) Biblioteca Palatina, Codex Parmensis, 1191, ff. 1-55,57.

特色 コンメンタリアの記述部分、碑文の頭書、ラテン碑文は全部ある。ギリシア碑文は少数で、原本のスケッチはない。

- (2) Biblioteca Vaticana, Codex Barberinus latinus, 4424, ff. 28—29

特色 画家ジウリアーノ・ダ・サンガルロのスケッチ・ブックの一部である。原本のスケッチは全部あり、記述部分も全部あるが、碑文は僅かしかない。

- (3) Fulvio ORSINI, *Imagines et elogia viorum illustrum et eruditor ex antiquis lapidibus et nomismatib expressa cum annotationib*, Roma (1570).

特色 26頁と28頁に、チリアコがアテネで採集した5碑文がある。オルシーニがどこからその資料を得たかは判明しないが、前記(1)と(2)の2写本の系統によるものである。

次にボドナーは、コンメンタリア原本より、アテネ、ペロポネソス、エピロス、ダルマティア方面よりヴェネツィアへの行程の部分が一度バラバラとなった後、間違った順序で綴じられてから筆写されたものをX₂と設定する。X₂の特色としては、原本の日付け、記述部分は忠実に筆写されている。ギリシア、ラテン碑文も全て写された。但、原本のスケッチは唯5つあるのみである。X₂より以下の写本と刊本が派生した。

- (1) Biblioteca Estense, Codex Mutinensis, 413, a. H. 5.14.

特色 Martin De Sieder が1503年に筆写したものである。De Sieder について詳しいことは分らない。彼は碑文のみに興味を持っていたらしく、記述部分、スケッチなどを省略して写した。

- (2) モロニ本。

バルベリーニ枢機卿が入手したのは、X₂であつたらしい。ボドナーはX₂の筆者としてフェリーチェ・フェリチアーノを示唆している。X₂はトレヴィーゾ写本が完成された後(1465年)、その続きとして書かれたのであろうという(「ボドナー本」117頁)。

断片の第2は、1442年8月から1443年3月にかけてのイタリア旅行の部分で、コンパニョーニが発見し、オリヴィエーリが1763年に刊行した。Olivieri, Annibale degli Abati, *Commentariorum Cyriaci Anconitani nova fragmenta notis illustrata*, Pesaro (1763) がそれ

である（以下「オリヴィエーリ本」と略称する）。

コンパニョーニ Compagnoni, P. (1693年生れ) は、小フランチェスコ・バルベリーニ枢機卿 (1662—1738) に宗教法学を教えた人である。正式の司書ではなかったが、バルベリーニ図書館へ自由に出入りできた。大フランチェスコ・バルベリーニ枢機卿 (1597—1679) は、碑文の写本を蒐集していたが、その一部が前記の「モロニ本」となったのである。コンパニョーニは、ムラトーリの求めに応じて「モロニ本」を送った。これがモデナのエステ家図書館に現存している。そしてこの「モロニ本」がムラトーリの碑文集 (Muratori, L. A., *Novus thesaurus veterum inscriptionum in praecipuis earundarum collectionibus hactenus praetermissarum*……, Milano [1739—1742]) の資料の一部となった。⁽³³⁾

断片第二の部分は、元来バルベリーニ・コレクションの中にあり、Tuscorum atque Ligurum という表題をもったコンメンタリアの一部であった。スアレシウス Suaresius という人が、モロニにこれも刊行することを勧めたが、実現に至らなかったといわれている。⁽³⁴⁾ Codex Vaticanus, 9140, f. 282以下に、スアレシウスの Tuscorum atque Ligurum の抜萃があるが、底本はバルベリーニ・コレクションのものであった。その底本がチリアコの自筆本であったかどうかは分らない。コンパニョーニは Tuscorum atque Ligurum の写本を発見し、オリヴィエーリに出版するようにと与えた。オリヴィエーリは、この写本はピチェーノ Piceno において、チリアコの筆蹟を知る者によって写されたという。⁽³⁵⁾ この写本も現存していない。同じ部分の抜萃が、筆写不明の Codex Neapolitanus, V. E. 18 としてナポリ国立図書館にある。

尚、オリヴィエーリ (1708—1789) は、ベサロの人で、考古学、碑文学、文献学を専攻した。著書は *Marmora Pisauriensia* (1737) 他、多数ある。

断片の第3は、1445年4月のキクラデス旅行に関するコンメンタリアの抜萃で、ミュンヘンのバイエルン国立図書館に、Codex Monacensis latinus, 716 として存在する。この写本は、シェーデル Schedel, H. の手になるもので、ヤーン Jahn, O. がコンメンタリアの抜萃であることを発見した。⁽³⁶⁾

断片の第4は、サッバディーニ Sabbadini, R. が発見し、1910年に紹介したチリアコの自筆本で、1447年より1448年にかけてのペロポネソス旅行の部分である。⁽³⁷⁾ ミラノのアンプロジアーナ図書館に Codex Ambrosianus-Trotti, 373, ff. 101—125 として現存している。サッバディーニ (1850—1934) は古典研究、人文主義の研究に数々の業績を上げたが、チリアコ研究史上においても特筆さるべきである。デ・ロッシも勿論この史料を知らなかったし、本史料の登場によって幾多の問題点が浮び上がって来ている。 (未完)

註

- (1) 13世紀より16世紀前半における考古学的立場よりの古代研究に関しては、Weiss, R., “Lineamenti per una storia degli antiquari in Italia dal dodicesimo secolo al sacco di Roma del 1527” *Rinascimento*, Ⅸ (1958), 141—201. が最も要を得ている。179頁にウェイスは言う、「(ルネサンス時代の)ギリシア考古学はアンコーナのチリアコに始まり、チリアコに終る。」つまり、トルコ

のギリシア征服が、近代に至る迄ギリシアの研究を不可能としたわけである。チリアコが各地を旅して碑文を写しておいてくれたのが、貴重な資料となっているのである。

碑文学一般については、以下の諸論文が概観を与えてくれる。

- (1) Hicks, E. L. & Hill, G. H., "Greek Inscriptions," *Encyclopaedia Britannica, Eleventh Edition*, XIV (1910), 626—629.
- (2) Hübner, E. & Lindsay, W. M., "Latin Inscriptions", *Encyclopaedia Britannica, Eleventh Edition*, XIV (1910), 629—638.
- (3) 栗野頼之祐「碑文」(ギリシア研究入門)東京 1949年 419—438頁。
- (4) 栗野頼之祐「西洋金石学」(世界歴史事典 第5巻)東京 1956年 387—389頁。
- (2) デ・ロッシに関する、より詳細な知識は次の諸論考に求められる。
 - (1) Stevenson, E. & Marucchi, O., *Bullettino della Commissione archeologica comunale di Roma*, (1894), 263 segg.
 - (2) Marucchi, O., *Nuova Ant.*, LIII (1894), 521—530.
 - (3) *Enciclopedia Italiana*, XI, 654.
- (3) Ashmole, B., "Cyriac of Ancona", *Proceedings of the British Academy*, XLV (1959), 26.
- (4) Tiraboschi, G., *Storia della letteratura italiana*, VI, 1, Modena (1776), 134—163.

ティラボスキ (1731—1794) の貢献は、未知の史料であったフランチェスコ・スカラモンティのチリアコ伝を発掘して学界に紹介した所にある。ティラボスキは自著の「イタリア文学史」第6巻第1部にこの史料を使ってチリアコの旅程を復原した。以後、現在に至る迄、チリアコの前半生に関する限り、前記スカラモンティの史料が根本的なものとなっている。

ティラボスキの「イタリア文学史」は、エトルスキの時代より17世紀末に及ぶ規模雄大な文化史とも称すべきものである。就中、ルネサンス時代に最も力を入れているので、チリアコに関して新史料を発掘して論述したものと思われる。

「イタリア文学史」の初版は、13巻本、モデナで1772年より1781年にわたって刊行された。第2版は16巻本、1787—1793年、かなり追補されたといわれている。

ティラボスキに関しては、

Enciclopedia Italiana, XXXIII, 908.

Encyclopaedia Britannica, Eleventh Edition, XXVI, 1005. を参照されたい。

- (5) Voigt, G., *Die Wiederbelebung des classischen Altertums oder des erste Jahrhunderts des Humanismus*, I, Berlin (1880), 271—288.

フォイクト (1827—1891) は、その主著「古典古代の復活、或いは人文主義の最初の世紀」において、チリアコの伝記を簡明にまとめている。この書は、ルネサンス概念論争の出発点ともいべきブルックハルトの「イタリア・ルネサンスの文化」(1860)の発刊に先だつ1年前、1859年に初版(1巻本)が出された。この初版は人文主義全体を概観した気鋭の書であり、ルネサンス研究史上でも記念碑的著作であるが、チリアコについては見るべきものがない。第2版は追加増補された2巻本で、1880年より81年にかけて刊行された。チリアコ伝は第1巻271—288頁にある。史料として「コルッチ本」を主とし、モムゼンの「ラテン碑文集」第3巻(Mommsen, T., *Corpus Inscriptionum Latinarum, III: Inscriptiones Asiae Provinciarum Europae Graecarum Illyricae Latinae*, Berlin [1873])の解説を参照している。フォイクトの没後、1893年にレーネルト Lehnerdt, M. の監修で、第3版2巻本が出された。チリアコ伝は第3版第1巻269—286頁にある。

イタリア語版も出された。*Il Risogimento dell' antichità classica ovvero il primo secolo dell' umanesimo*. で、訳者はヴァルブーザ Valbusa, D. , 第1巻は1888年、第2巻は1890年、フィレンツェで出版された。更にイタリア語版にはツィッペルによる補註も出されている。Zippel, G., *Giunte e correzioni*, Firenze (1897). 私が参照したのは、イタリア語版第1巻269—285頁にある

チリアコ伝である(以下、このイタリア語版を「フォイクト本」と略称する)。ツィッペルによる補註は、14—15頁にフォイクトのチリアコ研究を補っているが、1888年に出たロッシの研究も参照されている。

フォイクトについては

Enciclopedia Italiana, XXXV, 542. を参照されたい。

- (6) Ziebarth, E., “Cyriacus von Ancona als Begründer der Inschriftenforschung”, *Neue Jahrbücher für das klassische Altertum*, IX (1902), 214—226.
ツィーバルトによる略伝は、1902年以前の研究をよく消化して簡略にまとめられている。デ・ロッシの研究も勿論参照されている。
尚、ツィーバルトによる一連のチリアコ研究をあげておく。(AM は *Athenische Mitteilungen* の略)
- (1) “Cyriaci Anconitani Inscriptiones Graecae vel ineditae vel emendatae”, *AM*, XXII (1897), 405—414.
- (2) “Die Strabon-Scholien des Cyriakus von Ancona”, *AM*, XXIII (1898), 196—201.
- (3) “Cyriacus von Ancona in Pergamon”, *AM*, XXVII (1902), 445—446.
- (4) “Cyriacus von Ancona in Samothrake”, *AM*, XXXI (1906), 405—414.
- (5) “Κυριακὸς ὁ ἐξ Ἀγκῶνος ἐν Ἡπείρῳ”, *Ἡπειρωτικὰ Χρονικά*, I (1962), 110—119.
- (7) MacKendrick, P., “A Renaissance Odyssey, the Life of Cyriac of Ancona”, *Classica et Mediaevalia*, XIII (1952), 131—145.
- (8) Bodnar, E. W., *Cyriacus of Ancona and Athens*, Bruxelles-Berchem (1960). (以下「ボドナー本」と略称する)
- (9) Spadolini, E., “Il biografo di Ciriaco Pizzecolli”, *Le Marche*, I (1901), 70. n. 1.
スパドリーニはクイリーニについての文献を以下の如くあげている。
- (1) Degli Agostini, G., *Notizie Istorocritiche intorno la vita, e le opere degli scrittori Vinziani*, Venezia (1752).
- (2) Mittarelli, *Bibl. codd. mm. s. Mich. Ven.*
- (3) Bandini, *Bibl. Leop. Laur.*, II.
- (4) 「ティラボスキ本」第15巻。
- (5) 「フォイクト本」。
- (10) 「フォイクト本」269頁, 註2。
- (11) 「サッパデーニ本」239頁。
- (12) Treviso, Biblioteca Capitolare, I, 138.
スパドリーニによると、この写本はトレヴィーゾの人、ルドヴィコ・ブルケラーティ Ludovico Burchelati の所有であったという。Spadolini, E., *op. cit.*, 72.
- (13) Colucci, G., *Delle antichità picene*, XV, Fermo (1792), 1—155. (以下「コルッチ本」と略称する)
- (14) Ashmole, B., *op. cit.*, 26. n. 2.
- (15) 以下のフェリチアーノの略伝は、Mitchell, C., “Felice Feliciano *Antiquaris*”, *Proceedings of the British Academy*, XLVII (1961), 197—221. より要約した。ミッチェルはフェリチアーノの文献として次のものをあげている。
- (1) Mardersteig, H., “Nuovi Documenti su Felice Feliciano da Verona”, *La Bibliofilia*, XLI (1939), 102—110.
- (2) Pratilli, L., “Feliciano alla luce dei suoi codici”, *Atti del R. Ist. Veneto di scienze*,

XCIX (1939--1940), 33--105.

- (3) Felice Feliciano, *Alphabetum Romanum*, ed. G. Mardersteig, Verona (1960).
- (16) Ziebarth, E., "Die Nachfolger des Cyriacus von Ancona", *Neue Jahrbücher für das klassische Altertum*, XI (1903), 480--493.
- ツィバルトの論文は、チリアコの後継者ともいふべき碑文蒐集家たちを概観したもののだが、冒頭にこの周遊行が紹介されている。又、フェリチアーノはそのレポートともいふべき *Jubilatio* という文を書いた。その原文はツィバルト論文492--493頁に、イタリア語訳は Feliciano, *Alphabetum Romanum*, 20--21.にある。
- (17) Mitchell, C., *op. cit.*, 209.
- (18) Mardersteig, H., *op. cit.*, 106--108.
- (19) Pratilli, L., *op. cit.*, 38.しかしミッチェルは、スペインへは行かなかったとみている。
Mitchell, C., *op. cit.*, 201, n. 4.
- (20) Gottlieb, T., "Drei gemalte Bucheignerzeichen", *Oesterr. Exlibris Gesellsch.*, XV (1917), 45--46.
- (21) 1441年、チリアコとピエトロ・ランザーノ Pietro Ranzano (パレルモのドメニコ派修道士, 人文主義者) がペルージア Perusiaで出会った。Cf. Barcellona, V., "Memorie della vita letteraria e de' viaggi di Pietro Ranzano", *Opusculi di autori Siciliani*, VI, Palermo (1761), 76--77.
- その際ランザーノは、チリアコが自筆本3巻を持っているのを見たといわれる。レアンドロ・アルベルティ Leandro Alberti は「ドメニコ派のピエトロ・ランザーノは、彼(チリアコ)自身の手で書かれ、画かれた3大冊を見た」と言っている。 Cf. Alberti, L., *Descrizione di tutta l' Italia*, Venezia (1577), f. 285^v
- ランザーノに関する文献には、次のものがある。
- (1) Sabbadini, R., *Storia della R.Università di Catania*, 13, 43, 44, 52.
- (2) *Analecta Bollandiana*, XXIV (1905), 357--374.
- (3) Termini, F. A., *Pietro Ranzano umanista palermitano del sec. XV*, Palermo (1915).
- (22) 1496年に没したヴァチカン図書館の司書ジローモ・パオリ Girolamo Paoli は、1490年に「6巻の大冊が我々に辛うじて残された」と書いている。Cf. Ziebarth, E., "De antiquissimis inscriptionum syllogis", *Ephemeris epigraphica*, IX (1913), 213. パオリがいつ、どこでその6巻を見たかは分らないが、この証言により1441年の3巻が、没後6巻となっていたことが窺われる。
- (23) 「ボドナー本」70頁。
- (24) 「デ・ロッシ本」370, 375頁。アンコーナにいたチリアコの甥(名は不明)は、チリアコが集めた写本を売ったが、その中にチリアコが1444年アトス山で入手したプルタルコスの「モラリア」があった。現在、ヴァチカン図書館の所蔵となっている。(Codex Vaticanus graecus, 1309) この写本の末尾に買った人の覚え書があり、チリアコが修道院で見た写本のリストが書き添えられている。これは「モラリア」写本を買った人が、チリアコのコンメンタリア原本より写したと思われるので、コンメンタリアはアンコーナに保管されていたらしいという説をデ・ロッシが立てた。しかしチリアコは、しばしば友人たちにコンメンタリアの抜萃を書き送っている。従って「モラリア」写本を買った人は、そのような抜萃を見たのであって、原本を見ていないかもしれないとボドナーはいう(「ボドナー本」70頁)。
- (25) Sabbadini, R., "Ciriaco d'Ancona e la sua descrizione autografa del Peloponneso trasmessa da Leonardo Botta", *Miscellanea Ceriani*, Milano (1910), 240--241. (以下「サッパディーニ本」と略称する) 後述するが、サッパディーニは本論文において、コンメンタリア原本の断片を紹介した。

さて、アレッサンドロ・スフォルツァ Alessandro Sforza は1445年以降ペサロの領主であったが、その子コスタンツォ Costanzo と共に熱心に写本を集めた。1500年10月21日現在、スフォルツァ家の図書館には441点の写本があった。そのカタログの中に Chiriacus なる項があり、「ここに私はチリアコのコンメンタリアを見る」とサッパディーニはいう。図書館と写本は、1514年の火事で滅びた。Cf. Verarecci, A., “La Libreria di Giov. Sforza”, *Archivio storico per le Marche e l’Umbria*, III (1886), 501—503, 509, 511, 790.

(26) カルロ・モロニ (ラテン名カロルス・モロヌス Carolus Moronus) は、ルカス・ホルシュタイン Lucas Holstein のあとを継いでバルベリーニ図書館の司書となった。チリアコの書を印刷したこと以外は、余り知られていない。(「ボドナー本」78頁)。

(27) Weil, R., “Oeniade, Ein Beitrag zur nordgriechischen Reise des Cyriacus von Ancona (1436)”, *Beiträge zur Bücherkunde und Philologie August Wilmanns zum 25 März 1903 gewidmet*, Leipzig (1903), 347.

Larfeld, W., *Handbuch der griechischen Epigraphik*, I, Leipzig (1907), 34.

(28) 「デ・ロッシ本」363頁。

Ziebarth, E., “Cyriacus von Ancona als Begründer der Inschriftenforschung”, *Neue Jahrbücher für das klassische Altertum*, IX (1902), 218.

Mommsen, T., *Corpus Inscriptionum Latinarum*, III, Berlin (1873), 93.

(29) 「ティラボスキ本」135頁。

(30) ボドナーは、「モロニ本」成立前後の関係書簡を検討して、1660年4月27日以前に既に印刷されていたこと、1665年9月1日には、公刊の差控えを決めていたことを論証した(「ボドナー本」78—80頁)。そのような事情で「モロニ本」の入手は非常に困難であったが、ボドナーは註2の2書が「モロニ本」の再刊を記しているとして引用しているので、ここに再引用しておく(「ボドナー本」122頁、註1)。

Weil, R., *op. cit.*, 348.には次の表題と発行年があるという。

Inscriptiones seu epigrammata Graeca et Latina reperta per Illyricum a Cyriaco Anconitano apud Liburniam, Roma (1747).

Larfeld, W., *op. cit.*, I, 34.には次の表題と発行年があるという。

Epigrammata seu inscriptiones antiquae Graeco idiomate partim Latino exculptae variis basibus, lapidibus ac marmoribus per Illyricum ad Liburnam repertae ac defossae studio ac indagine Cyriaci Anconitani, Roma (1749).

(31) 「ボドナー本」114—117頁。

(32) 「ボドナー本」82頁、註5。

(33) 「ボドナー本」75頁。

(34) 「デ・ロッシ本」365頁。

(35) 「オリヴィエーリ本」8頁。

(36) Jahn, O., “Intorno alcune notizie archeologiche conservateci da Ciriaco [di Ancona]”, *Bulletino dell’Istituto di Corrispondenza Archeologica*, (1861), 191—192.

(37) コンメンタリア断片の部分は、「サッパディーニ本」202—232頁にある。サッパディーニの論考は、1933年の論文集の冒頭にも再録されている (Sabbadini, R., *Classici e umanisti da Codici Ambrosiani*, Firenze (1933), 1—52) 再版では、初版に見られるチリアコのスケッチの写真が省略されている。しかし初版では学界に知られていなかったチリアコ蒐集の碑文が、再版出版時には「ギリシア碑文」*Inscriptiones Graecae* に収録されていたので、関連巻数と番号のみが記されていて、碑文は載せられていない。

アンコーナのチリアコ伝のために

〔追記〕

本来ならば、この論文は「東欧史研究」第1号に発表するところであった。しかるに印刷所の都合で、一向に仕事をしてくれなかった。一方、「相愛女子大学研究論集」第17巻35頁に昭和44年度の研究活動として本論文のタイトルを掲載してもらったので、いわば幻の論文の如きものになってしまった。

そこで改めて本学の研究論集に載せてもらって、つたない成果をお目にかけることにした。御批判を戴ければ幸いである。

尚、興味あるテーマを示唆して下さい、関西学院大学名誉教授、栗野頼之祐先生に感謝の意を表する次第である。

(1970年8月17日)

栗野頼之祐先生は、1970年8月23日に永眠された。この論文を一番先に見てもらいたい方が亡くなられて、茫然としている。今は唯、本研究の完成を先生の霊に誓うのみである。

(1970年8月29日)